



郷土史

ていね

第 93 号

平成 27 年 9 月 9 日

手稲郷土史研究会

65第 112 回(平成 27 年 8 月 12 日)定例会の研究発表要旨

札幌の街づくりと都市整備

札幌公文書館職員

榎本 洋介氏

札幌近辺には、2 万年前からの遺跡があって、そのころから札幌の辺りを人がうろろろしていたと想像される。14・5 世紀あたりからアイヌの人たちの世界になる。

江戸時代の最後の頃から、本州から和人(倭人)たちが移り住み、村を作っていくという経過はあるが、ここでは省き、明治に入って開拓使という役所が札幌に街づくりを始めたところから話を始める。

また、「街づくり」という言葉は、人が集まって人間関係をつくるという意味もあるが、ここでは土木建設的な街づくりを話の中心とする。街は時代が進むにつれ、問題が派生し、それを改善しつつ発展してきた。今日は、その過程を振り返りながら「都市整備」の意味合いを考えてみようと思う。



明治維新が起こって、新施設ができ、いろいろな役所が置かれていく。北海道では、明治 2 年 7 月に開拓使という役所がつくられる。当時、道南地区しか進んでいなかった開拓を全道的に進めていこうという趣旨で置かれた役所である。

その開拓使の長官島義勇が、明治 2 年秋に札幌へ来て街づくりを始める。今の大臣・副大臣・局長という役職でいうと、局長に相当するのであろうか? その時の計画図を見ると、左側には「海」(石狩湾)、北の方には「大河」(石狩川)、その河口に「石狩」という地名、海の南側には「銭箱」と書かれている。

地図上(図略)、点線で書かれているのは当時の道路である。シノロ、カイコムラという地名が見られるが、カイコムラが、幕末に大友亀太郎が開いた村で、明治に札幌村といわれるようになる。石狩から茨戸の方を石狩川沿いに東区を經由して札幌の中心部へ繋がる道路である。

もう一つは、銭函から山沿いに星置・手稲辺りへの道路が見られ、豊平川を渡って勇払へ続く道路になる。幕末の安政の頃に勇払と石狩を結ぶ道路として作られた道路である。札幌越え新道、千歳越え新道、銭函道などと呼ばれていた道路である。札幌の中心部から南側の方は今の 36 号線に相当し、中心部から西側の方は旧 5 号線に相当する。

この計画図(図略)には、「お宮」と書かれたところがあり、今の北海道神宮のことである。昔は札幌神社と言っていたが、これらの村の脇に四つの村があり、島義勇はここに政治の中心都市をつくらうとしていたようである。

川を渡った所にトヨヒラムラと書かれたところがあるが、島義勇は移民制度を構想しており、その移

民を居住させる場所として計画していた街であろう（後にできる豊平村とは関係がない）。

この地図に、千歳への道、室蘭への道、有珠への道という三本の道路が書かれており、計画されていた道路のようである。

島義勇は、札幌を作るときに「市が発達すると世界の大名都となるだろう」という趣旨の詩^{うた}を詠っている。その詩は、市役所の1階のロビーに書かれているが、今では、その言葉どおりに実現したといっ
てよいであろう。

温泉と書かれたところがあるが、これは定山溪温泉である。これは幕末のときから知られていたところである。江戸時代の探検家・松浦武四郎が中山峠を越えて札幌へ入ったときに、温泉に入って疲れを取ったということが書かれた紀行文があり、そのころから知られた温泉である。明治10年頃のことである。

街の中心部では、北の方に大きな四角があるが、これは開拓の本庁の予定地である。300間四方の敷地であり、その真ん中に建物を造ろうとした。それは函館の五稜郭に似た建物をイメージしていたようである。明治4・5年頃の資料の中に五稜郭の箱館奉行所の建物を札幌へ移築しようとした計画が記録されているものがある。

本庁を建てる位置が一番北にあったことになる。その前に空間があるが、これが今の函館本線の位置になり、今の北6条くらいに当たる。札幌大川と書かれているのが、豊平川であり、ここに架かっている橋が豊平橋である。今は札幌駅前が中心街であるが、この図面（図略）から想定される中心は創成川沿いであり、創成川を挟んで両側に役人の家を造る計画であった。ここにある空間は、今の大通りである。明治2年に街づくりを始めたときに、既に大通りの空間があったことになる。ここに細長い「土居」と書かれた空間があるが、城壁である。大通りを挟んで南側に「本町」と書かれた四つの四角は、商人や大工さんたち、「土農工商」の「工商」に相当する庶民の住む場所である。当時の役人の大半は武士であったので、江戸時代の身分区分で考えてよいであろう。

このように見てくると、本庁（お城）の周りに大きな空間があり、家臣たちが住む街があり、その外側に大きな空間があり、その外側に庶民の住む街があるという模式図になっている。島義勇が造ろうとした街は、江戸時代の城下町を想定していたと思われる。また、周りの村で農作物を作り、街へ送り、また街の方では農具を作る職人たちが住み、経済的な循環を図ることも考えていたようである。

時代によって施設の役割は変わっている。例えばお堀は、関ヶ原の合戦ぐらまでは城防衛のためのものであり、江戸の平和な時代には、都市経営のための火防帯の役割を担うものとなる。札幌の大通りの空間は火防帯（主目的は防衛のため）であったと考えられる。

札幌の開発を急いだ事情があるようだ。ロシアとの関係において、幕末の時期から明治8年に樺太千島交換条約が結ばれるまで、非常に緊張した状態が続いており、その緊張を意識したため、お城を中心とした街を造ろうとしたと考えられる。

この図面（図略）には、「義勇」の朱印が押されており、他の書簡にも同じ印が使われている。このことから、図面は、リーダーとして派遣された島義勇が、札幌の街づくり計画に深く関わっていた証拠になるものである。明治2年11月14日から街づくりが始まるが、島義勇は翌年2月に東京へ帰っているので、札幌にいたのは4ヵ月程度になる。

北海道の11月は冬である。この時期から街づくりに取りかからなければならなかったのはなぜか？それは、幕末以来のロシアとの緊張感の問題があったものと考えられる。それを解消するために、ここに早くお城などを造って北海道開拓を進め、ロシアに取られないようにしようというような意図があっ

たのであろう。

札幌市は「碁盤の目の街」と言われているが、造り始めからそのような計画だったのではなく、明治4年の春から「碁盤の目」計画が作られ、それによって街づくりが進められている。島義勇の計画では北側に本庁を造る計画だったのであるが、実際にはそれが赤レンガ庁舎のあったところに変更されたようである。

札幌の中心部の一区画は60間四方で仲通りが6間というのが基本の形である。西1丁目は南北に仲通りがあり、西2丁目以西は東西にある。

明治5・6年頃、移民が沢山来るようになると、一区画を12に分割して割渡していく。したがって、135坪が当時の1軒分の敷地の基本形であった。実際には、2軒分、3軒分をもらっている家があるので、敷地は異なることがある。再開発でこの区画割は崩れているが、南1条西2丁目のところにまだその面影が残っているところがある。

街づくり計画の中には、道路幅11間、左右に3尺の下水道を取り、道幅10間とするという記述がある。実際に明治14年頃の写真に、そのような下水道が写っている。その下水道は創成川に繋がっており、生活排水がそこに流されていた。このように街づくりということは、単に人が住む場所を区画するだけでなく、住んだ後の生活のこと、周りに村を作ることによって経済的営みを潤滑にするなど生活すべてが考慮されなければならない。このようなことから、札幌の街づくり計画は江戸の城下町的なものを意識して進められたように推し量ることができる。このことは、札幌が「計画都市」と言われる所以の一つであらう。

このように移民を募って、街の中心には商人・職人たち、周辺には農民たちを入植させていくようになる。その結果、明治6年の図面をみると、発寒、琴似、篠路、白石、平岸、円山、手稲、上手稲、など多くの村ができている。

札幌市内に移民が住むようになり、例えば琴似・山鼻屯田であれば東北出身者、新琴似・篠路・屯田は西日本出身者が主である。「札幌区区政調査研究」より明治21年・明治42年のデータを見ると、北海道の移民者は、東北六県、北陸四県が多いようであるが、全国から移民してきていることが読み取れる。移り住んできた人たちは、村を形成していく。明治29年の地図を見ると、札幌区と山鼻村、円山村、豊平村、平岸村、月寒村、白石村、上白石村、札幌村、苗穂村、丘珠村、雁来村、篠路村、琴似村、発寒村、上手稲村、下手稲村、山口村の17村あったことが分かる。

札幌区（街の中心部、今の南7条から北10条、東7丁目から西10丁目位の範囲）の人口推移を見ていくと、明治15年には9,000人ほどだった人口が、明治20年13,534人、30年35,306人、40年66,193人と急増している。

開拓が始まって20有余年になり、人口が密集した中心部では地下の汚濁が懸念されるようになり、尿尿処理が問題となる。当時は、農家と市民、双方の利が合致し、近傍の農家が引き取ってくれた。しかし、明治期には競って農家が持って行ってくれた尿尿は、昭和期に入ると引き取ってくれなくなる。化学肥料が普及したこともあるが、都市が大きくなり過ぎて、バランスが崩れたのであろう。やむなく、役所で処理をするようになる。

人口増加に伴って、中心部は「開拓地札幌」から「都市札幌」へと変貌していく。尿尿処理に限らず、ごみ捨て、除雪など、いろいろな問題が派生する。

昭和35年頃の下水道整備計画の地図の中に下水道の先の矢印は豊平川、創成川、琴似川に向かって描かれている。生活排水はこれらの川に流していたのである。雨が降ると下流では溢れる。また蓋がな

いから臭いということもある。このことが、川の異臭問題を引き起こすことになる。そのような事情から、明治末から大正にかけて下水道の改良が進められ、異臭解消として、土管を利用した暗渠対策が取られた。さらに昭和 40 の計画から、下水処理の仕方も変わってくる。エリア毎に、下水処理場に集め、そこできれいにしてから川に流すようになった。このように人口が増えることによって新たな処理が必要になった。

これは下水処理に限らず、交通機関なども同じである。人口が増えることは郊外に人が住むようになるということであり、その人たちの輸送を考えなければならない。昭和 30 年頃には、電車とバスだけでは間に合わなくなった。交通機関や道路の整備が必要となってくる。最近では、道路の舗装率が 99.3% である。上下水道の普及率は 99.8% 以上になっている。このようにインフラの整備が進み、快適な生活ができるようになってきている。また、トイレの水洗化が進み、上水道の整備も進んでいったのが、昭和 40 年代から 50 年代である。

新たな問題が派生する。大雨により洪水になったときの水害の起こりかたが変わってくる。川が溢れる被害と合わせて、北区・西区の土地の低い地方では、下水が溢れ、マンホールから吹き出るといった被害が出たのが昭和 50 年の水害である。これは、舗装率の向上、下水管の普及率の向上が災いしている。開拓初期、北区や東区はほとんどが農地であったが、それが住宅地に変わった。農地のときは大雨になっても地面がそれを吸収してくれた。また水田もあったのでそれが水を貯めていてくれた。しかし、道路の舗装化によって降った雨水は下水道に流れることになる。これも都市化によって生じた問題である。

また、別の水害もある。建設庁は、水は大きな川へ流し、それを海へ流せば水害を防げると考えていたが、昭和 56 年の水害の時には千歳川と石狩川が合流するところで、石狩川の水量が多かったため千歳川の水が流れていけなかった。そのため水害が拡大してしまった。それ以来の水害対策として、ゆっくり流すような工夫がなされるようになる。

札幌でもいろいろな施策を変えていった。雨水を地下浸透させたり、保水・遊水機能を回復させる、雨水流出制御型の下水道が造られたりするようになる。浸水のない快適な都市造りの、この事業を「アクアレインボー計画」と言っている。

大規模開発が行われる所には雨水貯留池が設けられるようになった。0.1 ヘクタール以上の大規模開発地区には貯水装置を造ることを推進している。大雨のときに一時貯めておく施設である。また、学校のグラウンドや公園の周りに土盛りして、大雨の時には川から溢れた水を貯める池のような機能をもたせた遊水池（遊水地）として、大雨の水を一時貯めておき、それを少しずつ流すようにして、下水道が溢れるのを防ごうとしている。

札幌が、島義勇が言った「大名都」になるまでには、単純な一本道ではなかった。いろいろな問題が起こり、それを解決しながら、快適な街を目指して改造してきた。これからも新しい問題が起こり、その解決方法を探っていくことになる。この繰り返し「街づくり」、「都市整備」である。

ここまで、下水中心に土木建設的な視点から札幌の発展を見てきたけれども、他にもいろいろな問題がある。

今後の中心課題は「安全安心な生活環境づくり」ではなかろうか？
(文責：小田真二)

次回の予定

次回（10月14日）は澤口由美子氏
「稲積農場のよもやま話」の発表予定
です

会場は、3階の視聴覚室です。

分科会報告

★ 文芸サークル・開拓史研究部

8月26日、サークルで話を進めていますといろいろな疑問がでてきます。会では知識豊富な方々がおりますのでほぼ解決するのですが、それでも知りたい欲求がでてきます。そのときどうすればいいのだろう？ 知識検索の手段としては図書館もありますが、さらに資料館の活用を知りたくサークル会員を中心に「北海道立文書館」「札幌市公文書館」を見学しました。併せて中島公園を散策しながら「道立文学館」「豊平館」「八窓館（茶室）」「鴨々堂」を見学しました。井塚重男氏の適切な企画と梶本孝氏の名ガイドにより大変楽しい見学ができました。参加者は10名でした。



★ 資料部

8月27日総務部副部長谷川一弥氏の企画によって、手稲区歴史ガイドマップ説明板設置15カ所の見学をしました。参加者は22名という予想以上の参加で、主催者側は少々とまどったところもありました。手稲区の新しい発見をした一日でした。



9月の分科会カレンダー

分科会名	日 程	予 定
文芸サークル・開拓史研究部	9月23日	西尾貞敏氏を囲んで懇話会
手稲石の会	9月	未定
資料部	9月24日	パネル展準備

行事のご案内

● 日帰りバスツアー

日時 9月25日（金） 8時20分集合
集合場所 区民センター ロビー
見学場所 坂本龍馬家の墓、新十津川町開拓記念館、浦臼町郷土資料館、月形樺戸博物館

● 「手稲鉦山 ものがたり」講演・パネル展

日時 9月28日（月） 13時30分
会場 区民センター 第1・2会議室
講演 ①手稲鉦山の歴史と現在（林俊一）
②鉦山その生活と暮らしぶり（一ノ宮博昭）
パネル展 9月17～30日 区役所1階ロビー

会員の広場

タウン誌 前田新聞蜻蛉(トンボ)

シリーズ 《前田の歴史》特集

前田新聞蜻蛉、シリーズ《前田の歴史》の特集は2015年5月から(有)北海道新聞倉本販売店(前佐々木販売店)の道新購読者を対象とした配布エリア内で毎週(土曜日)発行されているタウン誌に組み込まれています。

先日、(有)倉本販売店企画編集部望月来央様より手稲郷土史研究会茂内義雄会長あてに、前田地区の「道新配布エリア内の歴史を特集したい」との協力要請があり、

この協力要請を受けて、手稲前田地区に居住する手稲郷土史研究会会員5名が執筆に加わることとなりました。

シリーズ「前田の歴史」(毎週第一土曜日発行)の第一回編集会議では、輪番でこの企画に執筆協力することを確認、既に9月までに4回発行されております。

明治初期からの歴史を、手稲前田の道新配布エリア内の「購読者(子どもたちにも)広く・わかり易く・楽しめるような地域タウン誌を目指す」、ものとして紹介するには紙面上の制約から大変むずかしい作業となりました。

道新購読者配布エリア内の前田地域(一部手稲神社・旧軽川駅舎含む)の歴史を、今に伝わる史実として、1年間連載するために毎月編集会議が開催されています。

限りある紙面に苦慮しながら企画編集、執筆をいただいている倉本販売店企画編集部望月来央様と手稲郷土史研究会会員の皆様、タイトルと執筆者名を記し感謝を顕してお礼申し上げます。

- 前田という地 ……………望月 来央
- 旧日本石油北海道製油所 ……………永井 道允
- 極東煉乳(株)・三楽酒造(株) ……………佐々木光男
- 前田遺跡・手稲遺跡 ……………菅原 直
- 軽石軌道(馬車鉄道)跡・石狩街道 ……猪股 修輔
- 新川と新川水系 ……………林 俊一
- 自作農記念碑 ……………佐々木光男
- 前田農場「東宮駐れん記」碑 ……………永井 道允
- 郷栄乃碑 ……………菅原 直
- 手稲神社奥宮と三角点 ……………林 俊一
- 北日本飛行学校「飛行場」跡 ……………菅原 直
- 旧軽川駅舎跡 ……………猪股 修輔

[敬称略]

直参考文献 手稲でみつけた手稲のはなし。 知られざる手稲と加賀百万石。
手稲区歴史ガイドマップ より (担当佐々木光男)



(写真は茂内会長所蔵)



お知らせ

手稲区民センター一階手稲区役所情報資料室の運営委員会をお知らせします
テーマは「前田農場」「手稲鉱山」「山口運河」「光風館」「子供歴史コーナー」「年表作成」の6グループです。 会員の要望の強かった区役所内の資料コーナーの設置に伴い各リーダーから会員の方へ協力要請があります、希望者も含め積極的な参加をお願いします。